

「不意打ち」に驚かされることを嫌った将軍 ——ダグラス・マッカーサーと朝鮮半島 1950～1951年——

アラン・R・ミレット

ダグラス・マッカーサー陸軍元帥にとって、1950～1951年の朝鮮戦争は最高の戦争であると同時に、最悪の戦争でもあった。朝鮮戦争は彼に仁川上陸作戦を成功させ、1950年10月初旬までは北朝鮮軍を敗走させたことによる栄光をもたらした。その後、12月には戦争は国連軍にとって不利となった。マッカーサーは、1941～1942年の対日戦における例と同様に、再び戦略的奇襲の餌食となった。今回は、敵である中国人民解放軍が、困難な作戦上の制約があることを知りながら、マッカーサーを驚愕させるとともに、彼が率いる韓国、米国その他7カ国で構成する国連軍地上部隊の連合軍を北朝鮮から追い出した。ほぼ5カ月間、マッカーサーは戦争を朝鮮半島以遠に拡大する構想を練った。彼は、中華人民共和国に対して空と海から攻撃すれば、中国人民志願軍（CPVF）を朝鮮半島から追い出し、1948年以来国際連合に認められた米国の政治的目標である朝鮮半島の二度目の解放と統一が可能になるだろうと主張した。だが、彼自身が大いに驚いたことに、成功しなかった¹。

1945年9月の日本の降伏から1950年6月の北朝鮮による侵攻まで、ダグラス・マッカーサーは、分断された朝鮮半島の米国とソ連による占領および1948～1950年の間の朝鮮半島における2つの対立する革命共和国の展開にほとんど関心を払わなかった。マッカーサーは、日本の復興と改革、そして1948年以降は、ソ連の侵略から日本を防衛することを重視した。朝鮮半島は、日本を統治する権限を付与された連合軍最高司令官（SCAP）、あるいは日本本土とその周辺の米軍に対する責任を持つ極東軍司令官（CINCFE）としてのマッカーサーの管轄に正式には含まれていなかった。米国とソ連は1945年12月のモスクワ

1 本稿は、バージニア州ノーフォークに所在するマッカーサー記念図書館所蔵の CINCFE / CINCUNC / SCAP であるダグラス・マッカーサー陸軍元帥の記録のうち、レコードグループ6～10に整理された私文書、書簡、メッセージのやり取り、組織による報告書および計画を史料とした。マッカーサーの文書については、Maj. Gen. Charles A. Willoughby Papers および D. クレイトン・ジェームズ博士が収集した資料により補足した。同博士は、下記の3巻からなるマッカーサーの伝記の著者である。*The Years of MacArthur* (Houghton Mifflin, 1985)。マッカーサーは、歴史について下記の書籍において自分なりに語っている。*Reminiscences* (McGraw-Hill, 1964)。その以前には、下記の書籍が出版されている。Courtney Whitney, *MacArthur: His Rendezvous with Destiny* (Knopf, 1956)。エドワード・M・アーモンドの文書は、ペンシルベニア州カーライルに所在する米陸軍遺産教育センター（U.S. Army Heritage and Educational Center）に保管されている。マッカーサーの政策的嗜好や戦争指揮の評価については、以下の米議会上院第82議会第1会期軍事外交合同委員会公聴会の記録を参照。“Military Situation in the Far East,” 5 vols., Government Printing Office, 1951, later published by Arno Press, 1979。

での会合で、単一の朝鮮政府で合意できるまでの間、共同信託統治を実施することに合意した。大韓民国、すなわち米国の占領地域は、1948年8月に正式に独立するまで、在朝鮮米陸軍司令部軍政庁 (USAMGIK) により統治され、その軍事的任務は米陸軍第24軍団およびその後継部隊で1949年7月に韓国から撤退した在韓国米陸軍 (USAFIK) が担った。

米陸軍のジョン・R・ホッジ中将が韓国におけるマッカーサーのカウンターパートであった。戦時の師団長および軍団司令官として、ホッジはマッカーサーの南西太平洋方面司令部 (Southwest Pacific Command) の指揮を受けたことがなかったが、米太平洋軍 (U.S. Pacific Command) の地上部隊であった米太平洋陸軍 (U.S. Army Pacific) の一員として日本軍と戦った。ホッジは模範的な戦績を残したが、彼はマッカーサーと特別な関係を持つことはなかった。ホッジは SCAP 同様、陸軍長官、1947年以降は統合参謀本部 (JCS) の助言を受けた国防長官から伝達される形で、占領政策に関する様々な外交・軍事委員会からの命令を受けた。最終決定権はもちろん最高司令長官であるハリー・S・トルーマン大統領にあったが、実際の権威の源はジョージ・C・マーシャル、ディーン・アチソン両国務長官を補佐していた、アジアの専門であった職業外交官のグループであった²。

従って、マッカーサーの朝鮮半島への関心は非公式なものであり、日本の政治改革の影響を受けて強くなることもあれば、弱くなることもあった。マッカーサーは朝鮮人を日本から本国に送還することの他、満州と朝鮮半島からの在外日本人の引き揚げに個人的な関心を寄せ、これらは1946年1月までにほぼ完了した。彼は朝鮮半島を統一し、その後は分割するための争いを注視していた可能性があるが、彼の役割は関心がある傍観者のそれであった。彼は李承晩大統領の就任式および大韓民国を主権国家として承認するために、1948年8月15日に1日だけ韓国を訪問した。マッカーサーは、その際に行った短い発言の中で、統一朝鮮がまだ実現されていない目標であることと、韓国国民が北緯38度線を用意なものとする方法を見つけることを期待することを強調した。その一方、彼は「カリフォ

2 Office of the Military Governor, USAMGIK, "History of the United States Army Military Government in Korea, September 1945 - June 1946," 2 vols., USFK Historical Files, Dean Center, US Base Yongsan, ROK; Hdgs. Far East Command, "History of the Korean War: General Headquarters Support and Participation (23 June 1950 - 30 April 1951)," 1951, mss history with documents, USAH&EC; Steven L. Reardon, *History of the Office of the Secretary of Defense*, Vol. 1, *The Formative Years, 1947-1949* (Office of the Secretary of Defense, 1984); Kenneth W. Condit, *The History of the Joint Chiefs of Staff: The Joint Chiefs of Staff and National Policy, 1947 - 1950* (Historical Division, Joint Chiefs of Staff, 1979); Historical Office, Dept. of State, *Foreign Relations of the United States 1948*, Vol. 6, *The Far East and Australia* (GPO, 1976). 米国の外交政策の概要については、下記を参照。Melvyn Leffler, *A Preponderance of Power: National Security, the Truman Administration and the Cold War* (Stanford University Press, 1992).

ルニアを防衛するがごとく、韓国を防衛する」と誓約した³。

しかしながら、韓国の防衛は極東軍 (FECOM) の優先事項ではなく、ソ連の脅威が米国の防衛政策に大きな影響を与えていた1948～1949年当時の JCS の戦争計画にも影響を及ぼさなかった。恣意的な予算策定方針により、米軍事力は概ね爆撃機に搭載される核兵器に限定された。マッカーサーの戦域における任務は、1945年のソ連の作戦が示唆していたように、北海道を目標としていたと思われるソ連の侵略から日本を防衛することであった。そのような攻撃を抑止あるいは撃退できるのは、米国の空軍力 (極東空軍 (FEAF)) および海軍力 (極東海軍 (NAVFORFE) / 第7艦隊) だけであった。在韓米軍基地は日本の防衛に貢献できないと、統合参謀部およびマッカーサーの統合戦略計画・運用群 (JSPOG) は考えていた。最後の在韓米軍部隊であった第5連隊戦闘団 (RCT) を撤退させることに国務省は反対していたが、マッカーサーは同省に同意しなかった。国務省のアジア専門家たちは、第5 RCT がウィジョンブ・コリドー (議政府回廊) においてソウルへの直接的な侵攻を防いでいたことから、その抑止力の価値を指摘したが無駄だった。1949～1950年に北緯38度線周辺の韓国陸軍 (ROKA) と北朝鮮人民軍 (NKPA) の部隊の間で多くの武力衝突が発生し、北朝鮮による侵攻の可能性が高まると、極東軍は韓国から在韓軍事顧問団 (KMAG) を引き揚げる計画を作成した。また、JSPOG も韓国を保持する要件を研究し、第5空軍の戦術航空支援の下で米2個師団による釜山港防衛が最低限のコミットメントとして特定した⁴。

マッカーサー元帥は、1948年を通じて韓国において反政府活動が激化するのを注視していたが、彼は KPA が侵略した場合に米国が介入する可能性について何ら正式な立場を取らなかった。1950年初め、ROKA 情報参謀と KMAG 情報グループで悲観論が高まったが、マッカーサーは ROKA に対して弾薬を提供すること以外の措置について JCS と協議することがなかった。FECOM 第2部 (G-2) の参謀であったチャールズ・A・ウィロビー少将は、G-2の下部組織であるソウルに駐在する韓国連絡事務所を通じて ROKA の情報分析をフォローした。米国の在韓外交使節団からの報告は、マッカーサーの政治顧問であるウィリアム・シーボルト大使を通じて FECOM に届けられた。また、FECOM は満州と中国で存続していた戦略事務局 (OSS) / 中央情報局 (CIA) のネットワークからの情報および依然として中国内部で活動していた中国国民党の情報組織からの情勢判断も受け取っ

³ SCAP remarks, August 15, 1948, "SCAP Sees Reunited Korea," *Pacific Stars and Stripes*, August 16, 1945; program, "National Celebration," Seoul, ROK, August 15, 1948, all in Personal Correspondence, 1948, RG 10, MacArthur Papers.

⁴ CINCFE to JCS, August 17, 1948, RG 9, MacArthur Papers; Minutes, Joint Staff FECOM meetings August 1, 1949 - June 6, 1950, Korea Files, RG 9, MacArthur Papers; oral memoir (1971), Maj. Gen. E. K. Wright USA, G-3, FECOM, Clayton James Papers, MacArthur Library.

ていた。加えて、ウィロビーは北朝鮮と満州に情報源を持ち続けていた大日本帝国陸軍の退役軍人からも助言を受けていた⁵。

1950年4月から5月にかけて、極東軍は韓国政府および KMAC から KPA が間もなく韓国に侵攻することを想定した情報と兵器の要請を受け取った。侵攻のタイミングは不確かであったが、分析官たちは KPA が梅雨（チャンマ）が弱まる8月まで待つだろうと推測した。マッカーサーは KPA の諸兵科連合の作戦を実施する能力が高まっていることを承知していたが、彼の戦略的視線は引き続き台湾の防衛と中国国民党軍の復興に注がれていた。彼は韓国軍のためにも、戦闘即応能力の評価を担当する米陸軍野戦軍本部が派遣した調査団により戦闘即応能力がないと判断された4個師団からなる自らの第8軍のために特別のアピールをまったく行わなかった。マッカーサーが1951年に米議会の合同委員会で証言したように、彼は米政府から侵攻が差し迫っていることや、それにどのように対応すべきかについて何ら警告を受けていなかった。マッカーサーの空軍・海軍それぞれの司令官、極東空軍のジョージ・E・ストラテマイヤー中将および米極東海軍の C・ターナー・ジョイ中将はともに侵攻を予測していなかった。危険が差し迫っている気配を伝えていた唯一の報告は6月15日付の KMAC の半期報告であったが、KMAC の長であったウィリアム・L・ロバーツ准将の個人的見解に異議を唱えるものだった。ロバーツは1月に東京で行われた会議の場で、マッカーサーおよびオマール・N・ブラッドリー統合参謀本部議長に対して、ROKA は軽歩兵として善戦する能力があること、1948～1950年の KPA との国境での衝突や韓国での共産ゲリラに対する掃討作戦において能力と強靱性を示したと伝えた。しかし、KMAC 報告は T-34戦車と赤軍の大砲で十分に武装したソ連型の KPA を ROKA が打ち負かす可能性は小さいとしていた。マッカーサーが朝鮮戦争の最初の数週間で驚きを見せたとしたら、それは ROKA がソウルの防衛戦において4日間しか持ち堪えることができな

⁵ The Willoughby Papers には、下記の内容が含まれている。FECOM Daily Intelligence Briefs, 1947-1951; copies of CIA and Army Staff G-2 studies and assessments; a mss history, "A Brief History of MacArthur's Intelligence Service," 1951; Lt. Col. Leonard Abbott, USA, "Korean Liaison Office Report," 1950 with attached agent reports, Willoughby Papers.

かったことに対してである⁶。

マッカーサーが北朝鮮の攻撃について最初に知ったのは6月25日日曜日の昼近く(日本時間)であったが、彼は正式に報告するまで約6時間待ち、これは6月25日午前1時(ワシントン時間)に届いた。マッカーサーはジョン・J・ムチオ駐韓大使、駐在武官、そしてKMAG司令官代理からの追加報告2件を読んだ後、北朝鮮が韓国全土を占領する明確な意図をもって、北緯39度線に沿った5つの地点で攻撃を仕掛けたというソウル駐在の米国人らの見方に同意した。彼の評価は、日本との平和条約について協議するために国務省がFECOMに派遣した特使ジョン・フォスター・ダレスの評価と一致した。それどころか、ダレスは6月25日夕刻に発信された米政府に対する彼の最初の報告書の中で、国連の承認のもとに米国が介入することを推奨した。マッカーサーは同日夕刻、ダレスに同行し、韓国を4日間訪問してきたばかりのジャーナリストであるウィリアム・R・マシューズに手短かに説明した。マッカーサーは北朝鮮の攻撃を「国際的な強盗行為であり、許しがたく、正当な理由のない侵略行為」だと形容した。彼はトルーマン政権が韓国を支援する勇気を持つことを期待した。彼はすでに釜山に弾薬と物資を輸送するよう命令を下しており、FEAFおよびNAVFORFEに韓国軍を支援する準備を整えるように予令を発した。マッカーサーは米国が介入する最初の兆候が侵攻を食い止めることを期待していたが、北朝鮮そのものは米軍が戦場で粉砕しなければならないだろうと考えていた⁷。

⁶ Brig. Gen. W. L. Roberts, briefing for CJCS January 24, 1950, appended memo, "Visit of Joint Chiefs of Staff to the Far East," February, 1950, File 091 (Japan), Records of the JCS, RG 218; Brig. Gen. W. L. Roberts to Maj. Gen. C. L. Bolté, March 8, 1950, G-3 (Plans and Operations) File 091 (Korea), Records of the U.S. Army Staff, RG 319, NARA II; Chief KMAG to C/S. ROKA, June 1, 1950, KMAG Historical Files, 1950, RG 554, NARA II; Hdgs. KMAG, Semi-Annual Report, January 1 - June 15, 1950, KMAG Historical Files; Amb. John J. Muccio, "Military Aid to Korean Security Forces," June 9, 1950 reprinted in Dept. of State, *Bulletin*, June 26, 1950; Frank Gibney, "Progress Report," *Time*, June 13, 1950; CINCFE to AC/S G-3, memo, "Disposition, Strength and Combat Capabilities of Major Army Forces in Overseas Commands," May 30, 1950, General Files, 1950, Records of the Army Staff (G-3), RG 319; Hdgs. Army Field Forces, report, training inspection, Eighth Army, FECOM, September - October 1949, U.S. Army Field Force Command Records, RG 554; CINCFE, memorandum on Formosa, June 14, 1950, RG 9, MacArthur Papers; Hdgs., SCAP/FECOM, memo, "General Orientation for the Secretary of Defense and Chairman of the Joint Chiefs of Staff," Tokyo, June 18, 1950, Selected DOD Records, Truman Papers.

⁷ U.S. Amb. J. J. Muccio to Sec State, June 25, 1950, reprinted in Dept. of State Pub. No. 3922, "United States Policy in the Korean Crisis," July 1950, RG 9, MacArthur Papers; CINCFE to DA (JCS), 3 msg., June 25, 1950, RG 9, MacArthur Papers. その他の1950年6月25～26日のCINCFEのメッセージは、トルーマン大統領図書館のGeorge M. Elsey Papers中の同氏が作成・管理した下記の特別なファイルにある。White House Subject File, Korea Classified. 同氏は、大統領の個人秘書兼歴史家である。また、下記も参照。Everett Drumright to J. Allison, July 5, 1950, Drumright Papers, Hoover Institution; William R. Mathews (editor, *Arizona Daily Sun*), "Korea with John Foster Dulles, June 24 - 29, 1950," Matthews Papers, University of Pennsylvania Library; Everett F. Drumright, "Visit to Korea of John Foster Dulles, June, 1950, John Foster Dulles Papers, Mudd Library, Princeton University.

ダグラス・マッカーサーが大いに驚いたことに、トルーマン政権は彼の作戦上の権限の拡大および増援部隊の派遣の要請を受け入れた。CINCFE が要請した増援部隊を編成するには時間がかかった。マッカーサーは米政府が迅速に北朝鮮に対する空・海作戦を認可し、朝鮮半島への第8軍展開を承認したことに驚嘆した。トルーマンの積極性に驚いたマッカーサーは、別の将軍に「信じられない!」と語った。トルーマンが目下の好戦的な立場を撤回しないようにするため、マッカーサーは6月29日に韓国を訪問し、その後に KPA を阻止できるのは米地上軍だけであると報告した。8時間もしないうちに（ワシントンでは電光石火のスピードと言える）、国務省と JCS の賛同を得た上で、トルーマンはマッカーサーが2個師団を戦闘に投入することを認めた（1950年6月30日）。米政府の支援の適時性に感激し、マッカーサーは韓国を解放し、その後に国連に認められた形で朝鮮半島全体を統一する方法をすでに決定していた⁸。

トルーマン政権の政策決定のエリートは、朝鮮が国連の支援の下で統一されることを阻止するために中国が介入することはないだろうというマッカーサーの確信に賛同していた。中国およびソ連の指導部は、国連の軍事作戦が鴨緑江を越えることはないの見込んでいた。UNC による航空作戦はまだ中国の領空を侵してはいなかったし、UNC による公式声明は、鴨緑江が依然連合軍側による空爆に対する事実上の障壁として作用していることを示唆した。米国には戦争を朝鮮半島以遠に拡大する国際的権限がなかった。米国はすでに1945～1947年に、国共内戦での共産党の勝利を阻止するために米軍はおろか米空軍力すら用いないという先例を作っていた。それどころか、国務省はその先例を通じて、米国はアジア大陸におけるいかなる戦争にも参戦する意思はないことをすでに示唆していた。1950年6月に最も驚いたグループは北京の中央軍事委員会だった。朝鮮半島への米国の介入は中国共産党内で毛沢東と彼を支持する急進派の権力を強めるとともに、実利主義的な建国者である劉少奇と鄧小平から権力を奪った。

マッカーサーが1950年7月に予想したように、第8軍と ROKA は大邱―釜山防御線で反撃し、1950年9月中旬までは消耗戦に勝利していた。勝利をもたらした重要な要素は歩兵の数（人数）で勝ったこと、国連軍の空軍と海軍が優勢であったこと、第8軍の火砲と対戦車火器が優れていたこと、そして米国の兵站が質・量ともに豊富であったことであった。マッカーサーや彼の FECOM 参謀長であり、熱烈な支持者の筆頭でもあったエドワード・

⁸ Transcripts of teleconference, CINCFE and JCS/Defense, June 30, 1950, msg 300740Z with notes in both MacArthur Papers and Elsey Korea File; conference notes, “Decisions, June 24-30, 1950, Elsey Korea File. マッカーサーの見解については、JCS 宛てのメッセージ C56942、MacArthur Papers および前述のライト少将の回顧録（1971年）に詳述されている。マッカーサーによる韓国訪問については、ジェームズ・H・ハウスマン中佐、白善燁大將、W・H・スターリング・ライト中將、Lim Sum-ha 少將（いずれも存命）から説明を受けた。

M・アーモンド少将が常に干渉したにもかかわらず、ウォルトン・H・ウォーカー将は優れた統率能力を発揮した。米第10軍団が敵の主力を迂回するための水陸両用作戦およびソウル解放(9月15～29日)がKPAの韓国からの撤退に拍車をかけ、これは9月16～17日の第8軍による釜山橋頭堡からの「包囲環破」による反撃および米第1軍団と韓国軍第1軍団が北緯38度線まで回復した後の2週間の軍事行動で確実なものとなった。「勝利に代わるものはない」という彼の戦略的確信の通り、マッカーサーは、戦争が鴨緑江を国境とする1つの朝鮮の成立をもって終了することを望んだトルーマンのアドバイザーたちの声に加わった⁹。

兵站面のリスクおよび韓国全土を奪還するために米第9軍団および韓国軍の半数が投入されたにもかかわらず、マッカーサーは少なくとも平壤を越えて北進を目指す米政府の決意を共有していた。勝利で威勢がよかったマッカーサーは、9月29日にソウルの上級司令官たちに状況を説明した。毛沢東が人民解放軍(PLA)12個師団に、満州に展開するようにと命令したという情報が増えているにもかかわらず、彼は中国の介入に関する懸念を無視した。ウィロビーの評価は、中国による「東北辺防軍」創設を見事な正確さで描写していた。CIAの報告ならびに中国国民党と韓国による情報の分析によりPLAが満州に集結しているのが確認されたが、そのことがトルーマンおよび国務省のアジア外交官らにとって深刻な懸念事項となった。マッカーサーが10月15日にウェーク島で大統領と会談した際、トルーマンは中国の脅威についてCINCFEに明確な意見を求めた。マッカーサーは中国が10月第1週に介入する絶好の機会を逸したと述べてトルーマンを安心させた。平壤は数時間のうちに米第1軍団と、その東側面にある韓国軍第2軍団により攻略されるであろう。米第10軍団と韓国軍第1軍団は北朝鮮の東部各道を掃討していた。万一、中国が今介入したとしても、UNC空軍が無防備な中国軍を粉砕するだろう。マッカーサーはトルーマンに「最大の大量殺戮となるだろう」と語った。トルーマンはそれほど確信がなかったが、彼もオマー・ブラッドリー統参議長もマッカーサーにその非現実的な予測について強く説明を求めな

⁹ CINCFE Op Plan 9-50, September 29, 1950, File 810.012, 8th Army/Dean HC; Schnabel and Watson, *The Korean War*, Vol. 3, Pt. 1, 96-107; Allan R. Millett, *Crossing the 38th Parallel* (CFC/8th Army Historical Monograph 98-1, 1998); FECOM-JCS teleconference 144, October 17, 1950, Willoughby Papers; CINCPACFLT, "Korean War: U.S. Pacific Fleet Operations, Report 1, 25 June - 15 November 1950," 1951, Operational Archives, NHC, Washington Navy Yard.

かった¹⁰。

そうした楽観論はマッカーサーの部下である司令官の多くにはまったく影響を及ぼさなかったが、CINCFE の楽観論はマッカーサーお気に入りの3人の将軍、すなわちウィロビー、FEAF 司令官のジョージ・ストラテマイヤーおよび第10軍団司令官のネッド・アーモンドの支持を得た。実戦部隊—第8軍、第5空軍、NAVFORFE—それぞれの司令官はマッカーサーの予言にさほど感銘を受けなかった。マッカーサー自身の極東軍 (FEC) の参謀さえも、ウィロビーを除いては、第8軍と第10軍団の主要師団の進攻の速度と地理的に分散し、部隊間の間隔が広がっていることについて懸念していた。現地報告、難民からの警告および散発的ながら断固とした共産主義者の抵抗は、NKPA の防御が強固になっていることを示唆しており、それは鴨緑江以南に中国軍師団が進出しているのを隠蔽するためである可能性があった¹¹。

マッカーサーは迫り来る中国の攻勢に関する兆候に無関心なままであった。ウィロビーは、スパイと航空偵察で報告されていた鴨緑江以南の中国軍の活動は、鴨緑江橋梁と発電所の哨線防衛のためだと説明し、中国の介入に対する CINCEFE の関心のなさを裏付けた。新たな部隊、物資集積地およびトラックと鉄道による輸送は、単に NKPA を強化するための中国側の取り組みで、新部隊は軍隊として組織された満州の朝鮮族であった。鴨緑江の防空態勢の強化に対しても同じ分析が行われた。「東北辺防軍」の増強に関する FECOM の立場は10月までかたくななままであった。つまり、PLA は鴨緑江北岸を防衛するために大規模であるが機動力に欠け、装備と兵站がともに貧弱な地上軍を創設したというものであった。韓国と米国の陸軍は国境に形だけ展開することは許可されていたが、JCS からマッカーサーに示された指針は UNC 部隊を中国とソ連の国境に近付けないようにせよというも

¹⁰ Memo, "Wake Island," President's Secretary's Files (PSF), Truman papers, based on General Bradley's notes and Col. A. L. Hamblen notes and summary in the Wake Island File (PSF). 上記には、アヴェレル・ハリマン、ディーン・ラスク、トマス・ペイス、フィリップ・ジェサップ、マッカーサーの側近である L・E・バンカー大佐も会議の記録と文書を保管しており、マッカーサー記念図書館の文書に保管されている。「公式の」記録係であったバーニス・アンダーソンはアチソン國務長官の特別顧問であるジェサップの下で勤務していた。CINCUNC が中国の攻撃はないだろうと述べたことについては疑いの余地はない。

¹¹ 深刻な情報の誤りはなかったとするウィロビーの説明は、下記にある。G-2, memo, "Chinese Communist Potential for Intervention in the Korean War," 1951, which includes FECOM daily intelligence summaries, October - December 1950, Willoughby Papers. FECOM G-2 files include ROK and Eight Army intelligence assessments. The 5th Air Force reports are in the Gen. E. E. Partridge, USAF Papers, Airpower Research Institute, Maxwell AFB, Alabama. 通信傍受による情報の限界については、下記に記載。David A. Hatch and Robert L. Benson, *The Korean War: The SIGINT Background* (NSA, 2000).

ので、彼は命令に従う意向であった¹²。

中国人民志願軍司令官の彭徳懷はすでに UNC 軍を戦闘で試すことを決定していた。彼は軽歩兵12個師団（約10万名）と軽砲約100門を北朝鮮に進軍させた。傘下の偵察部隊は、韓国軍第2軍団の3個師団が北朝鮮の丘陵一帯に散開し、平壤と鴨緑江の間の西海岸に沿って前進する米第1軍団の右翼を守っていることを報告した。1950年10月26日、中国軍が韓国軍第2軍団を襲撃し、韓国軍を4日間で敗走させた。さらに一層悲惨なことに、残る中国軍6個師団が韓国軍第2軍団をすり抜けて南下し、米第1軍団の右翼に展開中の韓国軍第1師団を攻撃して包囲を開始し、平壤の約50マイル北に位置する清川江北方の米第1軍団（2個師団および英連邦旅団）の残りを補足する可能性が出てきた。白善燁の師団と第1騎兵師団第8騎兵連隊が捨て身の戦いを行わなければ、軍団の残りの部隊が撤退し、再編成することはできなかった。第8騎兵連隊は兵力の半数と装備の大半を失った。その後、11月6日に、中国軍が撤退して姿を消した。第8軍は衝撃を受けたままで、また、満州方面から吹き寄せる北極風により気温が零度近くに急降下し、雪も降り始め、第8軍は酷寒に苦しめられた¹³。

これらの新たな敵の兵士たちは、在満朝鮮族による架空の軍隊ではなく、人民解放軍の部隊であるという明確な証拠が中国人の戦争捕虜と死傷者から収集されたにもかかわらず、マッカーサーとウィロビーは、中国が本当に交戦国として戦争に加わったわけではないという考えに固執した。他の UNC 高官の中でこのような空想を信じる者はほとんどいなかった。ネッド・アーモンドですら、本当の中国軍が参戦したと結論付けたが、彼は「洗濯屋」の寄せ集めが米軍を打ち負かすことができるとは本当に信じることはできなかった。マッカーサーの対応は、極東空軍に敵の軍隊が隠れている可能性のある北朝鮮の全ての場所に最大限の空爆を加えることを命令することだった。空爆に赴いた航空機は新たな空の脅威、すなわち中国語でも朝鮮語でもない言葉で戦術的指示を出すパイロットが操縦し

¹² NIE, CIA, "Chinese Communist Intervention in Korea," November 6, 1950, NIE Files, PSF, Truman Papers; Proceedings, 71st NSC meeting November 9, 1950, NSC Files, PSF, Truman Papers; Memo for C/ S USA from G-3, Army Staff, "State-Defense High Level Meeting on Korea," November 20, 1950, File 091 (Korea), RG 319.

¹³ 朝鮮半島における中国の軍事活動に関する筆者の主要な情報源は、中国人民解放軍軍事科学院（AMS）による *The Unforgotten Korean War* であり、これは国防長官府総合評価局の委嘱で PLA の歴史家チームが2006年に執筆したものである。同文書は、『中国人民志願軍抗美援朝战史』（1988・2000）の縮約増補版である。筆者は、朝鮮戦争問題について AMS の歴史家と意見交換を行うため3回訪中し、Li Xiaobing、Yu Bin 両教授からは貴重なご支援をいただいた。両教授とも PLA の退役軍人であり、朝鮮戦争の歴史研究者である。AMS の英語による解説には、中国軍の上級司令官の回顧録や CPVF の文書が頻繁に引用されている。地図は貴重である。その後新版『抗美援朝』（2014）が出版されたが、中国語版のみとなっている。

ている北朝鮮のマークをつけたソ連の MiG-15 ジェット迎撃機に遭遇した¹⁴。

中国とロシアが介入したという証拠をもってしても、マッカーサーは戦争における勝利を目指した再度の大攻撃を開始することを断念しなかった。勝利とは鴨緑江と豆満江を国境とする統一され、防衛可能な朝鮮の成立だった。マッカーサーは米第9軍団を北方に移動し、第8軍の残りの部隊との合流を求め、これにより米2個師団および韓国軍2個師団を清川江の両側に配置した。第3歩兵師団は日本における戦域予備の任務を離れ、第10軍団に加わった。第8軍の予備部隊には第1騎兵師団、第187連隊戦闘団空挺部隊、トルコ軍旅団、英連邦軍の2個旅団および再建された韓国軍3個師団が含まれていた。後方連絡線は復旧された鉄道および機雷と障害物が除去された大同江を航行する UNC 船舶輸送により平壤までつながっていた。MiG-15 およびソ連第64要撃戦闘機部隊 (IAK) の、所属がそれほど不明でもないパイロットの存在にもかかわらず、第5空軍、FEAF 爆撃軍、第77任務部隊所属の2空母航空群および第1海兵隊航空団が共産党軍を爆撃してあたかも清王朝時代のレベルに戻すべく待機していた¹⁵。

マッカーサーは、第8軍を金床、第10軍団をハンマーとする大規模な「圧迫による包囲」作戦によって、鴨緑江の南で包囲される可能性があるいかなる中国軍および北朝鮮軍をも粉砕することにこれ以上ない自信を抱いていた。JCSと自身の司令官たちをなだめるために、マッカーサーはより多くの偵察と兵站上の準備を可能にするため、攻勢の期日を11月15日から11月24日に延期した。彼はまた、空軍による目標設定の自由を拡大するよう働き掛けた。彼は中国軍の攻勢第1波の意義および中国軍が隠密かつ迅速な夜間攻撃でもたらしうる被害を無視し、マーシャル国防長官と國務省からの注意を促す助言を受け入れなかった。国連軍司令官(CINCUNC)は、英国からの警告を単なる宥和政策と見なして無視した。マッ

¹⁴ G-2, Hdgs FECOM, "Order of Battle information Chinese Communist Army," a compilation of reports and studies, November - December 1950, assembled in June, 1951, File 320.13, 8th Army Historical Archives (8th AHA), Dean Center, US Base Yongsan; entries, October - December 1950, "Personal Notes of Lt. Gen. E. M. Almond Covering Operation in Korea, Sept. 1950 - July, 1951," Almond Papers; William T Y'Blood, *MiG Alley: The Fight for Air Superiority* (Air Force History and Museums Program, 2000).

¹⁵ 英語で書かれた最も詳細かつ史料に基づく研究図書については、下記の2冊を参照。Billy Mossman, *Ebb and Flow: The United States Army in the Korean War* (Center of Military History, 1990) and Roy E. Appleman, *Disaster in Korea: The Chinese Confront MacArthur* (Texas A&M University Press, 1989). 米陸軍遺産教育センターには、両書籍の文書ファイルが保管されているほか、参謀部が作成し、ホワイトハウスおよび国防総省に提出されていた統合情勢報告日報 (Joint Daily Situation Reports) が保管されている。国連軍司令部は、隔週で運用概要および情報分析を編纂していた。写しについては、下記を参照。Ridgway Papers and Gen. Mark W. Clark Papers, The Citadel library, Charleston, SC. 空軍の公刊戦史については、下記を参照。Robert F. Futrell, *The United States Air Force in Korea, 1950-1953* (Office of the Chief of Air Force History, rev. ed., 1988). 私 (ミレット) は次の文献のほうを参考にした。Hdgs., Far East Air Forces, "Report on the Korean War," 2 vols., 1953 and Institute for Air Weapons, Air University, "F-86 vs. MiG-15: A Digest of Briefings on the Analysis of the Korean Air War," May 1954, Air University Library.

カーサーへの指針の変更をめぐる米政府内のあらゆる議論が無駄に終わった。11月24日、マッカーサーとその側近たちは空路北朝鮮に飛び、平壤北の新安州にあるウォーカーの前線司令部で地上部隊の指揮官たちと協議した。指揮官たちとの協議は概ね見世物であり、マッカーサーが最も重視したのは記者会見だった。そこでマッカーサーは勝利を予想し、クリスマスに一部の部隊を帰国させることができるとの期待を表明しさえした。その後、彼は北朝鮮の国境地帯の各道を通る遠回りのルートで空路日本に帰国した。ストラテマイヤー将軍の60歳の誕生日を大いに祝っていた同行者たちに、彼は同行者たちに、国連軍を攻撃したと他の人たちが主張していた中国の兵士たちの姿はまったく見当たらないと大喜びで指摘した¹⁶。

中国人民志願軍は10月19～20日から11月25日まで、朝鮮半島へ2波に分けて大々的な移動を行い、第8軍と第10軍団を攻撃した。第1波で移動した12万名の兵力（12個師団）が、11月6日に収束した攻撃を実施した。この成功の結果、毛沢東は彭徳懷が率いる軍を12個軍、36個師団に拡大することを命じ、これらを2つの軍集団に分けた。第1の軍集団は第8軍を攻撃、第2の軍団は第10軍団を攻撃することになった。国民党および日本軍を相手に20年の実戦経験を有する彭徳懷は今や、38万名の兵士を擁するCPVFを指揮していた。ウィロビーの最良の推測では、朝鮮半島にいる中国軍の兵力は10万人としていたが、彼は中国軍が今や警戒態勢を取っている第8軍を脅かすほどの装備はされていないと見ていた。彭徳懷と彼の最側近の参謀および司令官たちは、UNC 空軍および砲兵の殺傷力を理解していた。中国軍部隊は物資を背負い、あるいは動物に背負わせて運搬させ、夜間のみ前進した。昼間は村、洞窟、トンネル、溪谷や森の中に身を隠した。彼らは夜間に身を隠しているとき以外、調理用の火を起こさなかった。米軍の偵察機はトラックと列車を発見できても、冷たい食事をし、無線を使用しなかった中国兵を見つけることはできなかった。彭徳懷はけん引砲を移動させず、分解可能な迫撃砲と山砲だけを使用した。彼は支給された弾薬の量を半減させ、米軍の武器（中国国民党軍から鹵獲したもの）で武装した師団を先頭に配置した。彼らは鹵獲される米国および韓国の備蓄で補給するとともに、死者と捕虜から略奪できるはずである。同じ方針は食料や防寒着にも適用された。医療はよくてもせいぜい19世紀の水準であり、負傷した中国軍兵士で戦線に復帰した者は半数にとどまった。ソ連赤軍がドイツ軍と戦って学んだように、中国は米軍と戦うことで素晴らしい軍隊に発展することができるというスターリンの助言は、毛沢東と彭徳懷から見るとほと

¹⁶ CINCUNC to DA (JCS), November 25, 1950, FECOM General Files: Korea, RG 9 MacArthur Papers; entries November 24 and 25, 1950, Stratemeyer Korean War diaries, George Stratemeyer Papers, Air University Library.

んど慰めにならなかった¹⁷。

11月24、25両日で、CPVFは第8軍および米第10軍団の全ての主要部隊を攻撃することで、朝鮮戦争の戦略的方向性を反転させた。攻勢第2波の規模と激しさはすさまじく、最も脆弱なUNC地上部隊、すなわち、清川江西方の米1個師団、清川江をまたぐように展開していた米2個師団、第8軍の右翼に位置していたROKA 2個師団を圧倒した。第10軍団の行動区域では、攻撃は長津貯水池の第1海兵師団の2個部隊および第7歩兵師団の孤立した連隊戦闘団を襲った。彭徳懷の計画は、清川江の北側で米第1軍団を粉砕することであった。第1海兵師団の「殲滅」を重視したのは、心理的および戦略的目標があった。朝鮮半島に派遣された米軍師団の中で最強であり、最も知名度が高い第1海兵師団を敗北させ、その後の第10軍団（4個師団追加）を海路で撤退させ、第8軍を援護できなくさせることであった¹⁸。

第8軍が危険と損害の程度を把握しようとするなかで、マッカーサーはJCSを通じてトルーマン宛てのメッセージの洪水をワシントンに送り、UNCは「まったく新しい戦争」に直面していると主張した。マッカーサーは攻勢の第2波の時期と規模を予見していなかったことを認めることができなかった。彼は中国に対して驚愕するのではなく、激怒した。彼にとって、彭徳懷に欺まかれたことを認めることは不可能だった。中国の介入はマッカーサーにとって中国に対する戦争の規模を拡大することを提案する新たな機会となった。すなわち、中国国民党軍の活用、中国の海上封鎖、満州全域におよぶ爆撃作戦の開始および中国国内での反政府武装蜂起が始まることの後押しである。1950年初めに中国とソ連の間で友好同盟相互援助条約が調印されていたにもかかわらず、マッカーサーはソ連が戦争におけるその役割を拡大することはないだろうと考えていた。彼は、アジアにおいて勝利すれば、欧州における共産主義による軍事帝国主義の脅威に終止符を打つことができるであろうと主張した。そうなれば、6年間に及ぶスターリンに対する宥和政策を終わらせることになる。マッカーサーは11月28～29両日の夜にウォルトン・ウォーカーとネッド・アーモンドと協議し、情勢判断を行った。ウォーカーは彼の第9軍団がほとんど無力化されていることを認めたが、第1軍団は交戦しながら清川江溪谷から離脱したことを述べた。ウォーカーの第8軍の予備部隊は平壤周辺に防衛線を既に構築していた。彼には平壤を保持するのに十分な航空支援、物資および弾薬があった。ウォーカーは内心、第8軍は韓国に後退した方が

¹⁷ 中国側の懸念は、1950年11月15日～12月7日にかけて毛沢東・周恩来からJ・スターリンに送られた電信に記されている。スターリンの回答については、下記において再刊されている。Katherine Weathersby, “New Russian Documents on the Korean War,” *CWHP Bulletin* (Nos. 6-7, Winter 1995/1996), 48-52; Peng Dehuai, “Summary of the 1st Campaign since Entering Korea and Principles for the Next Stage War Operations,” November 13, 1950, reprinted in *The Unforgotten Korean War*, 137-142.

¹⁸ AMS, PLA, *The Unforgotten Korean War*, 153-157, 159-167.

いいと思っていることをマッカーサーには伝えなかった。ネッド・アーモンドは、第1海兵師団とタスクフォース・マククリーン／フェイスが包囲網から逃れるために戦わねばならないことを認めたが、彼らは脱出するだろうと予想した（1度は正しく、1度は誤りだった）。彼は依然として戦闘に耐えうる戦力として米2個師団と韓国軍2個師団を保有した。戦域の水陸両用部隊である第90任務部隊は、JCS がすでに承認している戦略的オプションである平壤—元山ラインの設定と保持を支えるために第10軍団を元山に輸送することが可能であった。ウォーカーとアーモンドは11月29日朝東京を離れたが、マッカーサーは彼らに北朝鮮に残るように命令するだろうと考えていた¹⁹。

その代わりに、マッカーサーは JCS に対し、彼の弱体化し、士気を阻喪した部隊は北朝鮮を保持できず、増援がない限り、韓国から撤退しなければならなくなるかもしれないと報告した。彼は、日本に撤退し、韓国人難民は済州島に行かせることを検討するべきなのかと尋ねた。ダンケルクあるいはバターの再来かというヒステリックな報道を無視する一方、JCS はなぜ CINCUNC の悲観的な報告内容と第8軍や第10軍のより落ち着いた報告内容との間で食い違いが生じているのかを疑問に思った。国務、国防両省の当局者で構成されたトルーマンの諮問グループは、陸軍参謀総長の J・ロートン・コリンズ大将を派遣し、CINCUNC と参謀部ならびにウォーカーと第8軍を視察させた。アレンは、ブラッドリー JCS 議長は、ウォーカーの参謀長であるレーブン・C・アレン少将に厚い信頼を寄せていた。ブラッドリーが第二次世界大戦において、ヨーロッパで第12軍集団司令官であった当時の軍集団参謀長であった。アレンはドイツのアルデンヌ攻勢への対応を立案し実行したので、関連する経験を有していた。ウィロビーを除く FECOM のスタッフは現実主義者であり、マッカーサーの飾り立てた誇張に魅了されることはなかった。コリンズが歴訪を終えた12月9日までに、トルーマン政権はマッカーサーに韓国を保持し、撤退は放棄するよう命じた。その間に、JCS は彼のためにより多くの兵力、特に重火器と戦術航空機を手配することにした。最終目標は依然として統一朝鮮であったが、中国軍に対する更なる侵攻によってもたらされるものは考えられていなかった²⁰。

¹⁹ 第8軍の報告を支持する内容の1950年11月29～30日における CINCFE と JCS のメッセージのやり取りについては、下記を参照。Korea File, RG 9, MacArthur Papers and File 471B, “Korean Emergency,” Office Files, Truman Papers. 同資料は下記の JCS による研究が含まれている。“Records of Actions Taken by the Joint Chiefs of Staff Relative to United Nations Operations in Korea... 1950-1951,” April 1951, copy in File 471B, Truman Papers.

²⁰ Gen. J. L. Collins C/S, USA, File, “Korea Trips, July 1950 - January 1951,” J. Lawton Collins Papers, Dwight D. Eisenhower Library; memo, Conference, CINCFE-CS USA, December 8, 1950, Gen. Matthew B. Ridgway Papers, USAH & EC; Report, NSC 6814, and proceedings, 74th Meeting NSC, “United States Objectives and Programs for National Security,” December 14, 1950, National Security Files, PSF, Truman Papers.

マッカーサーは何らかの交渉による決着にしかない戦略的態度を受け入れることをできなかった。北方の国境に統一された西側寄りの朝鮮が成立することを中国が受け入れざるを得ないような戦場での勝利を得る、という目標を、彼は決して放棄しなかった。国務省は依然、中国が中立化され、非同盟かつ必要最小限度に武装した朝鮮、すなわち「オーストリアン・ソリューション（オーストリア式解決）」として知られる最終状態を受け入れるかどうか疑問に思っていた。米議会とともに、1951年の平和条約が締結され、新憲法も制定されたことにより、間もなく主権を回復することになっている日本が反共同盟システムの一部ではない朝鮮を決して受け入れないだろうということを承知していたことから、国務省の政策顧問たちはこのオプションを諦めた。マッカーサーの思想的双生児である李承晩大統領が朝鮮半島に中国軍を残したままの状態と和平を順守することなどできるはずもなかったことは確かである。マッカーサーは中国が構想した合意はいかなるものであっても融和策に過ぎず、国連の絶対的命令による統一と共産主義勢力による最終的な朝鮮半島の支配に向けた第一歩、日本の繁栄と民主主義の転覆に向けた第一歩であるとみなしていた。彼はこのような将来の可能性に耐えることができなかった²¹。

その後、中国の革命と朝鮮半島の分断を米国が承認することを変えたいという願望を否定しつつも、マッカーサーは中国との戦争を拡大するため、「勝利に代わるものなし」というキャンペーンを開始した。1951年の1月からトルーマンに永久退役を命じられた4月まで、マッカーサーは共和党の連邦議会議員と報道機関に対する影響力を行使して、トルーマンに対し共産主義者と休戦について交渉しないように世論の圧力を高めようとした。彼には李承晩政権と米国内の同政権の支持者という声高なパートナーがいた。また、マッカーサーは英国、カナダおよびインドが主導する国連内の宥和の動きは、中国政府の指図を受けていると示唆した。英外務省内にいるソ連のスパイがUNCの計画を漏らしたとも主張した。マッカーサーは共産主義側の敗北を示唆する条件を受け入れるように彭徳懷と金日成に公にアピールすることで、休戦について中国と交渉しようとする国務省の早期の試みに先手を打って阻止することさえした。アチソンおよび W・アヴェレル・ハリマン国家安全保障担当補佐官に促され、トルーマンはマッカーサーを解任し帰国を命令、15年に及ぶアジアでの軍務

21 C/S USA and C/S USAF, memo, "Consultations with General MacArthur," January 15 and 18, 1951, CCA 381 (Far East), Records of the JCs, RG 218; Office of the Secretary of Defense, memo, "Analysis of MacArthur Issues," April, 1951, Sec Def Collection, Marshall Papers; NISE, CIA, Special Estimate No. 1, "International Implications of Maintaining a Beachhead in Korea," January 11, 1951, Intelligence Files, PSF, Truman Papers.

に終止符を打った²²。

マッカーサーは、解任に驚いたような素振りを見せなかった。誤解されたストイックな人物の役割を演じながら、彼は「勝利に代わるものなし」というキャンペーンを米国に戻ってからも展開、国民からの熱狂的な歓迎と全面的なマスコミ報道に迎えられた。彼は、側近に対しては、トルーマンの行動は大統領の精神不安定の悪化とマスコミに対する憤激に由来することを知っていると語っていた。米議会での演説で、マッカーサーは全国メディアで自らの主張を展開し、老兵は「消え去るのみ」と約束したが、彼がそうはしなかったのは確かである。1951年5月、彼は上院合同委員会で再びトルーマン、アチソンおよびマーシャルに異議を唱え、マスコミでまたしても大々的に取り上げられた。マッカーサーはこの時、「犠牲になった将軍」という別の役割を演じたが、これは1942年に演じた役割を再現したものだ。しかし、今回は同様の成功を収めることができず、1951年の秋には、マッカーサーは全盛期を過ぎた共和党員の隠れ家であり、多くの人物がそれぞれの回想録を執筆する場所であったニューヨーク市のザ・ウォルドルフ・アストリア・ホテルに居を定めた²³。

大失敗になるだろうという彼の悲観的予測にもかかわらず、韓国を保持する米国の企図は成功した。1951年1月～4月にかけての中国が3回にも及ぶ攻勢をかけたにも関わらず、UNC 地上軍が釜山に押し戻されることはなかった。運命の逆転にはいくつかの原因があったが、いずれも真の奇跡ではなかった。第一に、マッカーサーの軽い抗議を無視して第8軍がアーモンドの独立した第10軍団の統制権を握った。12月の交通事故でウォーカーが不慮の死を遂げると、後任としてマシュー・B・リッジウェイ中将が第8軍の司令官として朝鮮半島に派遣された。勢いが強く、才能豊かでマスコミにもアピールする将軍であるリッジウェイは（ウォーカーの参謀とともに）、第8軍から迷いと混乱を払しょくした。リッジウェイの軍の任務は、韓国を保持し、共産主義勢力を交渉に追い込むことであったが、いずれも1951年11月までに達成された。リッジウェイは4月にマッカーサーの後任としてCINCUNC および SCAP を襲ったが、もう一人の実績豊かな戦士であるジェームズ・A・バ

22 マッカーサーの解任および帰国に関する新聞、テレビ、ニュース映画に加え、マッカーサーは下記において自身の立場を記載している。*Reminiscences*, 389-414. トルーマン政権側の説明を理解するうえで最適なのは、下記のJCS ファイル内の個人的な報告やメッセージのやりとりを研究することである。“Events in Connection with the Change of Command in the Far East,” April 1951, CCS 013136, JCS Decimal File 1951, RG 218; アチソン、マーシャル両長官は、マッカーサーに関する資料を保管しており、現在はトルーマン大統領図書館が所蔵している。ジョージ・エルジーも、マッカーサーによる反休戦キャンペーンに関するトルーマンの声明および公式の談話について全て収集している。

23 一切の休戦交渉を妨害しようとした1951年におけるマッカーサーのキャンペーンに関する直近の学問的な研究としては、下記を参照。Michael D. Perlman, *Truman and MacArthur: Policy Politics and Hunger for Honor and Renown* (Indiana University Press, 2008) and Steven Casey, *Selling the Korean War: Propaganda, Politics and Public Opinion, 1950-1953* (Oxford University Press, 2008).

ン・フリート中將がリッジウェイの後任であった。国務省はリッジウェイが国際的な朝鮮休戦外交において御し難いことに気付いたが、マッカーサーよりマスコミの操作が得意であったリッジウェイはそれでも「議論は部内にとどめおく」という国防総省のルールに従って行動した²⁴。

予備部隊の動員、徴兵および1950年の危機の間に創設された訓練プログラムのおかげで、国連軍もまた多くの兵力を得た。ドワイト・D・アイゼンハワー大将の指示で1951年に北大西洋条約機構 (NATO) 軍の増強に一時的に優先する形で、極東軍は州兵の歩兵2個師団、16個砲兵大隊、2個戦車大隊および韓国と日本の兵站・戦務部隊により増強された。主として韓国および日本の労働者をスタッフとするアジアにおける支援システムは20個師団に拡大中の韓国軍にも恩恵を与えるほどの新たなレベルの軍事的規模に達した。在庫管理は忘れ去られた技術となった。国防予算が12ヶ月で3倍になったことから、弾薬、医薬品およびガソリンが交戦地帯に溢れるようになった。陸軍省はドイツとの戦争において最良の師団司令官と参謀であった上級司令官および参謀将校をアジアに派遣した。空軍、海軍および海兵隊も戦域にある部隊に同様の措置を講じた。彭徳懷の分析官たちは、中国政府に対し、CPVFはさらなるソ連製の武器の近代化と訓練なしではUNCの能力に対抗することはできないと伝えた(毛沢東は大いに不満だったが)。共産主義勢力の防空および輸送システムが改善されない限り、CPVFは陣地防御戦と消耗戦に陥る運命だった。台湾のことは忘れ、休戦を交渉せよ。米日同盟は中国をより脆弱にし、ソ連の軍事支援への依存度を高めた。このような中ソ関係は、スターリンが存命する間、毛沢東が嫌った関係である²⁵。

朝鮮戦争におけるマッカーサーの役割に驚きがあるとすれば、それは米国のアジア政策に対して彼が影響力を残していたことである。そもそも、朝鮮戦争そのものの影響が大きかったと言えるかもしれない。それにもかかわらず、マッカーサーは米議会の「アジア優先」グループがもはやフォルモサではない台湾島の中華民国の救済を保証すると信じていた。

²⁴ 1950年12月から1951年4月にかけてのリッジウェイの日誌や私文書からは、第8軍の戦略や運用をめぐってマッカーサーと問題を抱えたこと、そして彼が休戦の条件や北朝鮮への作戦を巡りJCSと最終的に提携したことが明らかになっている。リッジウェイの文書や米陸軍遺産教育センターのロイ・アップルマンによる注釈は、1951年における作戦に関して不可欠である。アップルマンは、下記において詳述している。*Ridgway Duels for Korea* (Texas A&M University Press, 1990)。リッジウェイは、下記において自身による説明を記載している。*The Korean War* (Doubleday, 1967)。

²⁵ Doris Condit, *The Test of War, 1950-1953 Vol. II in History of the office of Secretary of Defense* (Office of the Secretary of Defense, 1988)。中ソ関係に関する信頼できる研究として、下記を参照。Sergei N. Goncharov, John W. Lewis, and Xue Litai, *Uncertain Partners: Stalin, Mao, and the Korean War* (Stanford University Press, 1993)。また、下記も参照。Odd Arne Westad, ed., *Brothers in Arms: The Rise and Fall of the Sino-Soviet Alliance, 1945-1963* (Woodrow Wilson Center Press, 1998)。

アジア優先主義者たちは、日本、フィリピン、仏領インドシナ、マラヤ、香港およびタイを守った。彼らはインドネシアで過激なイスラム民族主義と戦ったが、1960年代には共産主義者と対立するインドネシアの急進派を支援し、パキスタン、ビルマ、タイおよびインドネシアで軍事独裁者を支持した。国務省が助長したいと考えていた中ソ対立は、巧みな外交を通じてというよりも米国の軍事的圧力と経済的現実を通じて、最終的に発生した。良くも悪くも（ベトナムの場合は悪い方だが）驚くべきは、アジアにおける米国の影響力がマッカーサーの不在にもかかわらずマッカーサー的に見えたことだった²⁶。

²⁶ そのような解釈の一つとして、下記を参照。Gerrit W. Gong ed., *Remembering and Forgetting: The Legacy of War and Peace in East Asia* (Center for Strategic and International Studies, 1996). また、下記も参照。Gerrit W. Gong ed., *Remembering and Forgetting: The Legacy of War and Peace in East Asia* (Center for Strategic and International Studies, 1996).

